

IV ま と め

条坊復原 今回の調査では、九条大路北側溝と右京九条一坊四・五坪間の坪境小路両側溝および同坊十二坪に接する坊間大路西側溝を確認することができた。そこで、今回の調査結果とこれまでの羅城門・朱雀大路の関連調査成果と併せて、九条大路の方位や周辺坪割り等について若干の考察を加えてみることにする。

九条大路に関する調査としては、昭和45年の羅城門跡第二次発掘調査があり、四坪東南隅で九条大路北側溝（以下単に北側溝という）を検出している。この時の北側溝北肩と、今回検出した四坪南西隅での北肩（しがらみ杭頭）を結ぶ線は、測量法に定める第6座標系の方眼方位に対して西で南へ $0^{\circ} 20' 21''$ の振れ（以下単に振れと呼ぶ）を持つ。一方、今回のⅢ・Ⅳ区で検出した北側溝北岸は西で南へ $0^{\circ} 15' 14''$ の振れを持つ。四坪東南隅と五坪西南での北側溝北肩の振れは西で南へ $0^{\circ} 21' 07''$ であり、北肩の振れの平均値は $0^{\circ} 19' 27''$ となる。他方、四坪東南での北側溝心と五坪西南での北側溝心との振れは西で南に $0^{\circ} 11' 29''$ で、北肩との振れの平均は $0^{\circ} 15' 28''$ となる。この値は、京造営の際の南北軸の基準となる朱雀大路の振れ $0^{\circ} 15' 41''$ に非常に近い数値である。

坊間路については、今回の調査で、四・五坪間の坪境小路中軸の位置を確定することができた。これを中心に朱雀大路および西側溝しか検出できなかった坊間大路との関係ならびに造営尺についてみてみよう。さきの羅城門跡の調査では朱雀大路西側溝および四坪東側築地跡を検出し、朱雀大路幅築地心々28丈で復原されている。一方朱雀大路の調査では六条々間路付近で大路の東西両側溝を検出し、朱雀大路幅は30丈と考察されている。平城京内での坪割りは道路心々間450尺が基本的な計画長であることが知られており、それぞれの方位の振れを考慮に入れた朱雀大路中軸と坪境小路中軸との距離を450で除すると造営尺が得られる。これによると、羅城門跡の調査成果に基づくと1尺は0.2826mとなり、朱雀大路調査の成果に基づくと1尺は0.2949mという数値を得る。いずれが正しいということは今回の調査からは断定できないが、これまでの京内の調査成果からは1尺=0.2949mが妥当な数値ではないかと考えられる。

次に坊間大路については、今回の調査で東側溝は国鉄関西線の下にあることとなり、路面幅を確定することはできなかったが、6～10丈の間にあるということになる。そこで、坊間小路から450尺の計画尺をとった推定坊間大路心と今回検出した西側溝下層溝心との距離を求めると約9.3mとなり、これを折り返した坊間大路幅員は6丈強となる。この数値を現地にあてはめると、Ⅱ区の東端から国鉄関西線の西側法面にかかる付近となる。

観音寺の所在 右京九条一坊一帯は大和郡山市観音寺町に属する。福山敏男氏は、『正倉院文書』や『続日本紀』天平10年3月条・『今昔物語』巻11・『僧綱補任抄出』天武2年条に見える観世音寺（または観音寺）の寺名が地名として残ったものと解された。^(註) 今回の発掘調査では、十二坪の南辺築地付近から、以東の坪に比してはるかに多くの瓦類が出土した。その軒瓦は6272-6644という特異な組み合わせを主体とし、平城宮所用瓦の組み合わせがこれに付随する。さらに鬼瓦も出土しており、この十二坪を中心として寺院が存在した可能性を示唆する。天平10年以前から存在し、奈良時代において貴重な経典を蔵した寺のひとつとして重視され、入唐僧智通が創建したと伝える観音寺こそがその寺院であったと推測できる。

(註) 福山敏男『奈良朝寺院の研究』1948年

地 点 名	X	Y	地 点 名	X	Y
九 条 大 路 北 側 溝 心 (第125次Ⅳ区)	-149739.47	-18795.17	九条大路北側溝心 (羅城門調査)	-149738.85	-18616.52
右京九条一坊四・五坪間坪境 小路心(第125次Ⅲ区)	-149738.32	-18701.87	朱雀大路西築地心 (羅城門調査)	-149719.20	-18614.34
朱 雀 大 路 心	-147833.00	-18577.85	八条大路北側溝心 (第123-23次)	-149210.90	-19380.06

表4 方位計測座標表